渾身の力をふるわれた矢作先生

小沢　和光

今から 12 年前の初夏、マシーセンの『アメリカン・ルネサンス』を徹底的に読み込む先生が学習院にいらっしゃるとの噂を聞きつけました。古典アメリカ文学に引き付けられていた私は早速その秋から、友人の紹介で矢作先生のゼミに参加し始めました。年度途中のいわゆる「もぐり」であったにも関わらず、先生は暖かく迎え入れてくださいました。その後、大学院に進み、6 年にわたって先生の指導を受けることができました。

先生のゼミは一回一回が真剣勝負でした。少人数の輪読形式で進行する授業は、事前に充分な読み込みが要求されました。通り一遍の予習では、すぐに化けの皮が剥がされる緊張感のあるものでした。英文の発音指導から始まり、全体の論理を踏まえた上での自然な日本語訳を求められ、また、引用文の出典を探しておくことも必要でした。深く、徹底的に読み込むゼミでした。妥協を許さない先生の勢いに圧倒され、マシーセンが常に頭から離れない状態となり、電車の中でも、コーヒーを飲むときも、時を忘れ読み続けました。

また、先生は定期的に文学作品の一節を取り上げ、レポートにまとめる課題を私たちに与えました。レポートは原稿用紙 3 枚という短い設定で、取り組みやすいようでいてその実、文章に無駄が許されない厳しさがありました。原文の言葉と対峙し、作品のキーワードを手がかりに一つの議論を組み立て、これを土台に、作品全体の世界を追求してゆくのです。このレポートの数が増えるにつれ、英文を読む面白さが深まっていきました。先生は研究の一貫した継続を、「溶鉱炉の火を絶やしてはいけない」という言葉で表現され、私

たちを励ましてくださいました。私はこの作品の一節も持ち歩き、どこで何をしていても作品中の言葉が心の中で響いているような毎日でした。

そして、先生はただ英語や文学を指導されるだけではありませんでした。私が教員採用試験の面接で不安だった際に、わざわざご自宅で面接の練習をしてくださいました。私が目新しい教材に頼ろうとすると、先生はすぐに私の教壇に立つ不安を見抜かれました。「小沢は小沢のままでいい」と、また「小沢だからこそ目立たないような生徒にも寄り添える」との言葉に、それまでの英語や文学を通した先生の厳しさや迫力からは想像したことのなかった先生の情の厚さにはっとしました。そして私は不安から解放されたのです。

先生は、英語に対し、文学作品に対し、人に対し、常に真摯に全力で向き合っておられました。ゼミの学生が卒業した後も、時々声をかけ、忙しい中でも酒を酌み交わし、仕事がうまくいっているか、気持ちがくじけていないか、生活ぶりはどうか、気にされていました。学生のその先の人生までも、幸福と成長を願い、決して手を抜かない姿勢は、研究、教育のみならず先生の生き方であったと思います。

先生に出会えたことを感謝しております。心よりご冥福をお祈りします。

（都立新宿山吹高等学校　教諭）